

生徒の自己効力感を高める生徒指導主事の取組

－対話を軸とした発達支持的生徒指導の実践を通して－

前橋市立みずき中学校 小林 朱里

I 研究の背景

改訂された「生徒指導提要」では、特定の児童生徒に焦点化した事後指導中心の生徒指導から、学校体制で日常の教育活動を通じて行う、全ての児童生徒の「成長・発達を支える」生徒指導（発達支持的生徒指導）への転換が目指されている。「自己効力感」や「コミュニケーション力」などを身に付けることを支える働きかけであることが強調された。

本校は、真面目で学校の決まりを守って生活できている生徒が多いが、一方的な思い込みや感情のコントロールができないことからトラブルに発展する事例が増えている。コロナ禍において友達と深く関わる活動が制限されたことにより、人間関係が固定化され、特定の親しい友達以外とは対話が少なく、コミュニケーション不足が懸念される。また、新しいことに挑戦することを拒んだり、「やらされている感」が強く、自分たちで考え、自分たちの力でクラスや学校を変えていこうとする意識をもてなかったりする生徒も多く見られる。5月に行ったQ-Uの結果からは、自分の考えや能力に自信がもてていない様子が見える。これらのことから、自己効力感の低さが課題として挙げられる。一方、多忙な教育活動の中で、教職員同士の対話も少なくなっており、生徒理解を深めるための情報共有が十分にできなかったり、生徒指導について共通認識をもてていなかったりする現状がある。生徒・教職員両方に共通する課題としては、対話不足が挙げられる。

このような課題を解決するためには、教室や職員室で意図的に対話の場を設け、関係性の質を高めることで、心理的安全性のある学校生活をつくっていくことが必要であると考ええる。生徒指導主事として、学校がチームとなって生徒を支えていく体制づくりを進めていくとともに、生徒同士が関わり合いながら、自分たちで考え、判断し、実践することを通して、自己効力感を高め、自信をもって行動できるようにしたいと考え、本主題及び副主題を設定した。

II 研究の目的と方法

1 研究の目的

生徒指導主事として、対話を軸とした発達支持的生徒指導の実践を通して、心理的安全性のある学校生活をつくり、生徒の自己効力感を高めることを目指す。

2 研究の方法

対話を軸とした発達支持的生徒指導の実践として、以下の内容に取り組む。

【語り合い、受け止め合う学級活動】

安心して自分の気持ちや考えを伝えたり、相手の気持ちに共感したりすることができるようにするために、ワールドカフェの手法や思考ツールを取り入れた学級活動を行う。

【生徒を信じ、任せる活動】

生徒の参画意識を高められるようにするために、生徒と教師の対話を通して行事や校則の意義を確認したり、内容の見直しや企画、運営について生徒が考えたりする機会を多く設ける。

【共通認識をもって、チーム支援ができる教職員集団づくり】

立場や年齢の異なる教職員が気兼ねなく交流できるようにするために、校内研修においてワールドカフェの手法を取り入れる。また、生徒指導部会においては、協議することで、役割を明確にしたチーム支援ができるようにする。

Ⅲ 研究内容

1 語り合い、受け止め合う学級活動

表1に三つの学級活動の概要を示す。一つ目では、普段発言が見られない生徒も話合いに参加できるようにするために、ワールドカフェを取り入れた。二つ目は、怒りを感じたときに攻撃的になってしまったり、自己主張ができなかったりする姿が見られたため、怒りの感情と向き合い、適切に表現する方法を考える「アンガーマネジメント」を取り上げた（p.106資料1）。三つ目は、学習意欲の低下や進路への不安を強く感じている生徒が増えてきたことから、学習の悩みを相談し、自分に合った学習方法を考える授業を行った（図1）（p.107資料2）。



図1 思考ツールでの対話の様子

表1 三つの学級活動

学級活動(1)ウ 集団生活の向上 「みんなが笑顔になる学校を目指して」		学級活動(2)ア よりよい人間関係の形成 「怒りの気持ちを上手に伝えよう」		学級活動(3)ア 主体的な学習態度の形成 「自分に合った学習方法を考えよう」	
手立て	ワールドカフェ	手立て	ピラミッドチャート	手立て	Wチャート

2 生徒を信じ、任せる活動

学年行事や生徒会活動において、教師主導から活動の主体を生徒に任せることで、生徒の自主性を生かすようにした。「このままでよいのか」「どのようにしたいのか」を生徒に問いかけ、生徒の思いや願いを共有することを心掛けるとともに、自分たちで進めるのだということを意識付け、生徒の参画意識を高められるようにした。

「情報モラル教室」は、例年講師を招へいし、生徒指導主事が進行役を務めていた。今年度は、生徒の活躍の場を増やすため、学級委員と一緒に企画運営を行った。学級委員が、「ただ話を聞いて終わるような会にたくない」「自分たちの問題として考えてほしい」という思いから全校生徒にアンケート調査を行い、それを基に学校の課題を洗い出し問題を提起した。講話後、学級委員の投げかけにより、「①個人情報を守る②使用時間2時間以内を守る」というメディア宣言を提案し、全校生徒の承認を受け、決定した。

今年度、「対話的な校則の見直し」をスタートさせた。生徒会本部役員と学級委員から成る「みずき中ルールメイキング委員会」を組織し、全校生徒の声に耳を傾けながら、生徒と教師の対話により校則を見直していく形を生徒指導部会から提案した。生徒会本部役員は、「生徒が苦しさを感じない校則にしたい」「よりよい学校生活につながる校則を考えたい」という思いをもっており、その思いを基に、まずは校則の意義や内容について生徒会本部役員が全校生徒にアンケート調査を行った。結果を生徒会本部役員が分析し、校

則に対する生徒の思いや困り感を洗い出した。同時に、教職員間において「校則見直しは、単に校則を緩和し生徒の要望を受け入れるのではなく、生徒の意見を尊重し、成長・発達を支える機会である」と捉えることを十分に確認して、生徒指導担当職員と生徒会本部役員の話合いにより、みずき中の「校則見直しに関するガイドライン」を作成した。全校生徒が笑顔でいられる学校にするために大切なことについて、生徒と教職員が互いの思いや考えを伝え合い受け止め合いながら対話を進めた。

3 共通認識をもって、チーム支援ができる教職員集団づくり

立場や年齢・キャリアに関わらず、教職員間で対等にアイデアや意見を出し合い、共通認識をもったチームになるための素地づくりを行った。

(1) 校内研修

校内研修の中の生徒指導主事が担当する学校危機管理について、ワールドカフェを取り入れ、「今日が楽しい明日も来たいと思う学校をつくるために」というテーマを設定した（表2）。多くの意見が出され、活発な交流となった（図2）。生徒が学校に行きたいと思えるためには、「認められ、見守られている」「いつでも相談できる」「ありのままの自分でいられる」ことが重要であること、さらに、そのための支援の在り方について、対話を通して教職員の間で共通認識が図られた。

(2) 生徒指導部会

今年度の生徒指導部会は、情報交換に終始せず、協議事項を必ず設けるようにした。校則見直しに関することや学年から挙げられた問題について、協議時間を十分に取り、具体的な指導方法や今後の見通しを決められるようにした。その結果、合理的な理由が説明できない校則を見直したり、学年だけでは対応しきれない事案に対し、役割分担を明確にして指導・支援を進めたりしたことで、チームで連携して対応することができた。

表2 3段階に設定したワールドカフェのテーマ	
ラウンドテーマ1	
生徒が学校生活の中で、笑顔や生き生きとした姿を見せるときは、どんなときですか	
ラウンドテーマ2	
そのような笑顔や姿が見られるときの共通点は何ですか	
ラウンドテーマ3	
生徒が「今日が楽しい」「明日も来たい」と思う学校にするためには、どのような取組や工夫が必要ですか	



図2 ワールドカフェでの対話の様子

IV 結果と考察

三つの学級活動では、安心して自分の考えを伝えたり、自分に合った具体的な目標や実践方法を決め実践への意欲を高めたりする姿が見られた（表3）。また、クラスで行ったワールドカフェは、学年ワールドカフェにまで広がった。さらに、学級活動での対話を通して、生徒から新しい学年行事が発案され、生徒主体で企画・運営された。

表3 三つの学級活動と生徒の振り返り		
「みんなが笑顔になる学校を目指して」	「怒りの気持ちを上手に伝えよう」	「自分に合った学習方法を考えよう」
○楽しい学校生活にするために何が必要か友達と楽しく考えることができた。 ○手を挙げて自分の意見を言うことは苦手だけれど、ワールドカフェだと緊張することなく伝えることができた。	○ピラミッドチャートで「自分も相手も納得できる伝え方」という観点があったので、より上手な伝え方を考えられた。 ○自分の怒りのタイプを踏まえた伝え方で、よりよい友達関係を築きたい。	○Wチャートにまとめてみると、先生に質問したり、付箋紙を使ったりする学習方法もあることが分かった。 ○先輩のアドバイス動画を見て、授業を大切に集中して取り組もうと思った。

表4に示したQ-Uの結果において、①②の項目は「全くそう思わない」が0%になった。これは、学級活動において、自分の考えを発信したり認めてもらったりする機会が増えたことが要因だと考えられる。また、③の項目は、「とてもそう思う・少しそう思う」が増

えた。生徒の振り返りに「やる気が出た」「自信がもてた」などの記述（表5）が見られたことは、学級活動での発言の機会や学年行事の実行委員や班長の任務を通して、他者からの承認や励ましを得たことが要因と考える。

表4 5月と12月のQ-U結果の比較 単位（％） 対象者は、1学年生徒

項目	とてもそう思う		少しそう思う		どちらとも言えない		あまりそう思わない		全くそう思わない	
	5月	12月	5月	12月	5月	12月	5月	12月	5月	12月
①クラスの中で存在感があると思う	31	32	24	36	24	16	17	0	4	0
②自分の考えがクラスの意見になる	0	21	24	36	41	28	24	12	10	0
③自分を頼りにしてくれる友人がいる	51	52	24	41	16	7	5	0	4	0

またQ-Uにおいて、非承認群から学級満足群に入った生徒が3名いた。承認得点が12点上がった生徒Aは、「今まで間違えることが怖くて自分の意見を言えなかったけれど、学活や学年行事でいろいろな友達の考えに触れ、間違えることは駄目なことではないと感じるようになった」と話し、文化発表会の実行委員に挑戦した。友達との対話を通して、失敗を恐れない前向きな気持ちが芽生えたと考えられる。

教職員アンケートの「生徒の心理的安全性を育むための取組を考える校内研修に、ワールドカフェを取り入れたことは有効な手立てになっている」の項目では、「そう思う」が90%だった。本研究の手立てについて回答を求めたところ、表6の意見が挙げられた。教職員の間に対話の価値や発達支持的生徒指導に対する理解が生まれ始めたと考えられる。

表6 教職員アンケートの自由記述

語り合い、受け止め合う学級活動	生徒を信じ、任せる活動	共通認識をもって、チーム支援ができる教職員集団づくり
○対話により、生徒が自分の存在感を認識し自己肯定感を高めていた。 ○生徒同士の対話、教師との対話を通して、自己を見つめ、主体的な行動が取れるようになっていて感じた。 ○発達支持的生徒指導を全職員が実践できれば、学校が変わり生徒が変わると思った。	○生徒主体の活動を行うことは、課題や成果を自分事として考えることができ、実践する意欲につながっている。 ○情報モラル教室では、学級委員が責任感をもって頑張った。終了後、褒められているときの表情がよかった。後輩のよい目標になっていた。	○今回の校内研修は、楽しく盛り上がり、生徒の心理的安全性も考える中身の濃いものとなった。 ○情報共有の重要性は、すべての先生が感じている。多忙だが、もっと教職員同士の対話する時間が必要だと改めて感じた。

表5 生徒の振り返り

○先生から「自分の考えを言えるようになったね」と言われて少し自信がもてた。
○初めの実行委員で不安だけれど、友達から頼りにされてやる気が出た。

V 研究のまとめ

1 研究の成果

対話を軸とした発達支持的生徒指導を行ったことは、生徒の心理的安全性を高め、主体的な取組につながり、自己効力感を高めるための一助となった。教職員間では、生徒の心理的安全性をベースとした発達支持的生徒指導を意識した授業づくりや委員会活動などが行われるようになった。

2 今後の課題

生徒指導主事として、校内研修部と連携し、生徒指導と学習指導の一体化を目指すとともに、教育相談部と連携し、生徒指導と教育相談が一体となったチーム支援を目指す。生徒指導の年間指導計画を作成の上、生徒の心理的安全性を高める支援を組織的・計画的に進めながら、引き続き発達支持的生徒指導への意識を高め、実践を継続していく。

参考文献 文部科学省(2023).生徒指導提要/「月刊生徒指導」編集部(2023).生徒指導提要(改訂版)全文と解説 学事出版株式会社/新井肇(2023).支える生徒指導の始め方ー改訂・生徒指導提要10の実践例ー教育開発研究所/文部科学省 国立教育政策研究所 教育課題研究センター(2015).学級・学校文化を創る特別活動(中学校編)/大佐古倫徳(2021).生徒の学習力を育成する学習システムの開発と実践ー学校と家庭で学習をつなぐ効果的な学習法の指導を通してー群馬大学大学院教育学研究科専門職学位過程教育実践高度化専攻課題研究報告書要旨集/河村茂雄(2012).学級集団づくりのゼロ段階ー学級経営力を高めるQ-U式学級集団づくり入門ー図書文化/安藤俊介(2008).アンガーマネジメント 大和出版

学級活動指導案

- 「怒りの気持ちを上手に伝えよう」 学級活動（２）ア よりよい人間関係の形成
- ねらい
「怒りの温度ゲーム」や身近な事例を基に、怒りの適切な伝え方について考える「ピラミッドチャート」を取り入れた話し合い活動を通して、自分の怒りの捉え方について理解し、自分に合った怒りの適切な伝え方について意思決定できるようにする。

3 本時の展開

学習活動	時間	指導上の留意点・支援
1 本時のめあてをつかむ (1) アンケート結果を振り返り、「怒る」ことは悪いことではないが、怒り方に課題があったことをつかむ。 (2) 課題を確認する。	5分	○アンケート結果を表やグラフにまとめて提示することで、現状を把握しやすくする。 ○アンケート結果から怒りの伝え方を確認し、その伝え方をした結果どうなったかを生徒に問いかけることで、課題に気付き、めあてをもてるようにする。 ○生徒の発言や気付きを肯定的に受け止めることで、生徒の意欲を高めるとともに、生徒から、「怒るときの3つのルール」を引き出す。 <3つのルール> ・自分を傷つけない・相手を傷つけない・物を壊さない
自分の怒りのタイプを知り、怒りの上手な伝え方を考えよう。		
2 話し合う (1) さぐる ○「怒りの温度ゲーム」を行い、客観的に自分の怒りを捉えるとともに、怒りには幅があることや怒りの感じ方には違いがあることを知る。	5分	○「怒りの温度ゲーム」で使う出来事カードは生徒から挙がった事例を使ったり、切実感がもてる事例を使ったりして、生徒にとって身近でイメージを膨らませやすいものになるようにする。 ○視覚的に捉えやすくするために、「怒りの温度カード」は、怒りのレベルを5段階で色別に表現する。 ○怒りの感じ方には違いがあることや、自分の怒りの捉え方について理解するために、「怒りの温度カード」を、オクリンクを使って一斉共有したり、グループで怒りの温度と理由を伝え合ったりする。
○「出来事」に対して、なぜその怒りの温度をつけたのか、理由を各グループで伝え合い、自分の怒りのタイプを知る。	5分	○温度の違いや受け止め方の違いが出てきた場合も、どちらが正解・不正解、よい・悪いと決めつけないようにすることで、多様な意見を尊重できるようにする。 ○聞き上手な生徒、質問上手な生徒の言動を具体的に称賛し、クラス全体で共有することで、積極的に怒りの温度の理由を伝え合えるようにする。

学習活動	時間	指導上の留意点・支援
(2) 見つける ○人や自分を傷つけず、物を壊さずに怒りを適切に表現するには、どのように伝えればよいのかについて考える。 ○グループで決定した意見をホワイトボードに書き、黒板に掲示し、共有する。	20分	○考えを焦点化しやすくするために、思考ツールのピラミッドチャートを用いる。 ○根拠を明確にしながら、よりよい伝え方を整理していけるようにするために、ピラミッドチャートの階層に「①感情的でないもの②お互いに納得できるもの」という条件をつける。 ○グループ全員が極端な考え方に同調している場合は、多角的に捉えられるようにするために、「他の考え方はないだろうか」「自分にとっても周囲の人にとっても建設的な考えになっているだろうか」と声をかける。 ○「上手な伝え方」が思い浮かばないグループには「NGな伝え方」を先に考え、何が悪いのか、どう直すのかを考えるように促すことで上手な伝え方についてつながられるようにする。 ○意思決定の一助となるよう、共有の際は、伝え方で意識したことや表現のよさについて聞き、「伝え方のコツ」として提示する。
(3) 決める ○自分に合った怒りの適切な伝え方を考え、意思決定する。	10分	○自分が選んだ怒りの伝え方と選んだ根拠をグループで伝え合い、それぞれの意思決定を認め合うことで実践意欲を高められるようにする。 ○日常生活の中で実践に対するモチベーションを維持できるようにするために、意思決定カードに書いた自分の怒りの伝え方を教室内に掲示し、可視化する。 ○考えを共有し、自分に合った怒りの伝え方を意思決定できるようにするために、根拠を明確にして意思決定できた生徒を意図的に指名する。 評価項目（評価方法） ◎多様な意見をもとに自分に合った適切な怒りの伝え方について考え、意思決定している。 【思考・判断・表現】（意思決定カード）
3 本時の学習を振り返る。 ○気付きや今後の生活への生かし方などを振り返りシートに記入する。	5分	○生徒が自信をもてるように、授業を通して生徒のよさが感じられた場面、発言や行動を具体的に称賛する。 ○自己肯定感を高められるようにするために、ペアでお互いの気付きや学びを伝え合い共有できる相互評価の時間を設ける。

学級活動指導案

1 「自分に合った学習方法を考えよう」 学級活動（3）ア主体的な学習態度の形成

2 ねらい

Wチャートを用いた5つの学習方法を観点とした話合いの場の設定を通して、現在の自分の学習についての課題を見いだし、友達や身近な人の学習方法に学びながら、自分にふさわしい学習方法を考え、意思決定できるようにする。

3 本時の展開

学習活動	時間	指導上の留意点・支援
1 本時のめあてをつかむ ○アンケート結果を振り返り、学習に対する苦手意識をもつ人や自分に合った勉強方法が分からない人が多いことを知る。	5分	○アンケート結果を表やグラフにまとめて提示することで、現状を把握しやすくする。 ○1年後には中学校生活が折り返し地点になることを想起できるようにし、学習方法について考える必要感をもてるようにする。
自分の学習の課題を知り、自分に合った学習方法を考えよう。		
2 話し合う (1) さぐる ○勉強でうまくいかなかったこと、困っていることを出し合う。	5分	○生徒の発言や気付きを肯定的に受け止めることで、生徒の意欲を高めるとともに、生徒の「自分の学習方法の弱点」を明確にする。 ○自分の弱点をつかむことが、自分にふさわしい学習方法を見つける第一歩であることを伝え、活動への意識を高められるようにする。
(2) 見つける ○「うまくいった勉強法」や「やってみたい勉強法」をグループで出し合いWチャートに書き出す。	15分	○自分なりの工夫を友達に伝えたり、友達の学び方を真似したりするなど、様々な学習方法や学習観に触れることができるようにするために、グループワークを設定する。 ○生徒が自分に足りない学習方法に気付けるようにするために、学習方略の観点から学習方法を5つに大別し、分かりやすい言葉（①繰り返し学習、②工夫学習、③確認・修正学習、④物・人学習、⑤モチベーション）で示す。 ○グループで話し合う際は、学習方法を多面的に捉えやすくするために、思考ツールのWチャートを用いる。Wチャートは、視覚的に捉えやすくするために、観点別に5色に色分けをして提示する。 ○ちょっとした工夫でも、学習方法のヒントになることを伝え、積極的に自分の考えを付箋紙に書けるようにする。

学習活動	時間	指導上の留意点・支援
○ギャラリーウォークを行い、多様な考えを共有し広げながら、自分にふさわしい勉強方法を見つける。	10分	○自分の班で考えつかなかった学習方法や、自分の中にはなかった学習に対する考え方を知り、自分にふさわしい学習方法を見つけるヒントにするために、他のグループのWチャートを見に行く時間を設けたり、友達や保護者など身近な人の学習方法を紹介したりする。 評価項目（評価方法） ◎友達の学習方法に学びながら、自分にふさわしい学習方法を考えたり、選んだりしている。 【思考・判断・表現】（発言・観察）
(3) 決める ○自分にふさわしい学習方法を選び、意思決定する。	5分	○プロット図を用いて、「取り組みやすさ」「課題解決への有効性」という2つの視点から実践する学習方法を決定することで、自分にふさわしい学習方法を意思決定できるようにする。 ○学習に対して前向きに考えられない生徒がいるときは、授業中や日頃の学習への取組の中で目に留まった頑張りを具体的に伝え、学びに向かう意欲を高められるようにする。 ○自分にふさわしい学習方法を意思決定できるようにするために、自分の課題を基に、5つの学習方法を生かしながら根拠を明確にして、意思決定できた生徒を意図的に指名し、その考えを共有する。
3 発表し合い、実践にむけた意欲を高める。 ○グループ内でお互いのプランを認め合い、前向きな気持ちをもつ。	5分	○自己肯定感を高められるようにするために、互いに意思決定した内容について励ましたり、称賛したりするように促す。
○先生や先輩のエール動画を見て、意欲を高める。	3分	○意思決定した学習方法に自信をもち、実践への意欲を高められるようにするために、生徒にとって身近な教師や先輩からのエール動画を流す。 ○身近な体験談を聞くことで、「自分にもできそう」という代理的体験を積み、自己効力感を高められるようにする。
4 振り返りシートを書く。	2分	○「なりたい自分になるために（こう在るために）今日の学活をどうに生かしていきたいか」、「これからの自分にどんな意味があったか」などの項目に答える振り返りシートを書くことで、現在及び将来の学習と自己実現のつながりを考えるきっかけとなるようにする。